

水に対する感性の歴史

ソルボンヌ(パリ第1)大学 アラン・コルバン

<編集部より>

「感性の歴史家」として著名なアラン・コルバン氏は、この講演で、西ヨーロッパにおける、淡水の様々な姿や表現が、人々の心やイメージとどのように結びついているか整理を試みています。一見難解に見えるかもしれませんが、日本人が水に抱くイメージとは異なる報告がなされており、私たち現代日本人の「常識」を問い直す力をもっています。

最初にコルバン氏が講演で示した水の分類を編集部で一覧にまとめたものを以下に示します。講演本文と共に参照いただき、テーマセッションでの「里川」を理解する手助けとなれば幸いです。

1. 水を形態で分類する

	大分類	具体的な水の姿	性質・象徴的意味
コルバンの分類	無定型な水	雲、もや、霧	ものや生き物の形を変え、 幻想的な領域をもたらす
	地面に降りる大気中の水分	露	媚薬がつくられた
	人間と大気現象を結びつける水	雨	内面を生き返らせる、繁栄、 はかないもの
バシュラールの分類	流れる水	河川 小川	蛇行イメージ、循環 清涼感
	暴力的な水	大量の雨、雷雨、嵐、 洪水	根元的な水、秩序の創始と 終末
	澱んだ水		

2. 水の様々な機能

水の機能	具体的な水の姿	性質・象徴的な意味
飲料としての水	雨水	現代の蒸留水
	泉の水	地中を通る
	井戸の水	
	河川の水	
	湖の水	
	沼の水	

水の機能	具体的な水の姿	性質・象徴的な意味
恩恵をもたらす水	泉	生命を維持し、若さを保つ 純潔と処女性、本質、混じりけのないもの 自然の恵み、繁栄の源、母性 都市に不可欠な装飾
	井戸	穏やかさの魅力、地下世界の恐怖
	温泉	人を癒す
災いをもたらす水	沼	マラリア、瘴気、有毒ガス、呪い、きつね火
	洪水	水に呑み込まれるという魅惑、
	澱んだ水	コレラの原因との思い
	流れる水	取り返しのつかない、変化への恐怖
聖なるものとしての水		浄める力、活力を回復させる
	洗礼の水	キリスト教徒に変える力
	泉	病の治癒力
	聖水	悪魔を祓う
エロティックな水		若い女性のみずみずしさ、母親的な水と女性的な水、水浴女性の不意打ち
	造形芸術に現れた水と女性	男の欲望の激しさ、覗き趣味、女性の脅威、望ましき女性像
	砂漠のオアシス	官能的な悦楽
運動力の源としての水	水車と用水路	恩恵をもたらすと同時に不吉
	筏流し	過酷な労働
	運河	便利
	ダム	国土復興と繁栄
感情に影響を及ぼす水	川	冥界とのつながり
	鏡としての水	ナルシス、死と憂鬱、自己発見の喜び
	湖、流動する水	自我、欲望、愛の情熱、死の衝動 ミネラルウォーターの流行、公的なものと私的なものの境界の厳密化
水の美的規範	海	崇高美
	川、湖	自然美、ピクチュアレスク美学

今日は、私が以前『浜辺の誕生』(藤原書店、1992)で論じた「海水」ではなく、「淡水」について話したいと思います。これは大変大きなテーマですので、この問題を考えるためのいくつかの手がかりを提示してみたいと思います。

水を形態から分類してみる

アラン・コルバンの分類

18世紀末以降に西洋で出版された辞典や教科書、とりわけ「実物教育」と題される教科書を読むと、水(淡水)は無味無臭で、無色透明です。水は液体で形がないうえに、喉の渇きをいやすという性質を除けば、いかなる性質もないということになります。

【実物教育】

子どもたちへの教育法の一つで、様々な事物や現象を子どもに観察、体験させ、教員との問答を通じ、事物や現象の名称、形状、特質、機能、用法などを子どもたちに教えていく方法。object teaching のことで、実物教授、庶物指教、等と訳される。

ところが水は「特徴のなさ」として定義されるにもかかわらず、社会的にはきわめて複雑で豊かな水の評価システムが存在します。この点を入念に分析すれば、西洋における水の豊かさを指摘することができます。

このことを把握するために、水が持つ多様な「形態」を考察してみましょう。大ざっぱに言って、次のような区別ができます。

第1は「無定型な水」です。雲、地表から立ち上るもや、霧を構成する水。これらは、新たな世界が我々の宇宙に入り込んで来るかのように、霧やもやは、ものと生物の形を変え、異質・幻想的なものの領域をもたらします。これは私の最新作『風景と人間』(藤原書店、2002)の中で示したとおりです。

【霧の意味】

「霧は長い間、夜と結びついて魔女の領域を示すとされたのです。ホメロスから現代に至る文学においては、霧が聖と俗の境界を成しています。霧は不可視の世界へと導き、地上と天国を分かち、とりわけ約束を違えた者や愛を裏切った者などが住む世界への通路でした。より広く言えば、この歴史をつうじて霧は埋没、侮悛、懲罰と結びついています」(アラン・コルバン著、小倉孝誠訳『風景と人間』藤原書店、2002)

第2は「露」。地面に降りる大気中の水分です。かつては露から媚薬が作られていました。

第3は「雨」。雨は人間を大気現象の力と結びつけ、植物や人間の内面性を生き返らせる源です。さらに、雨はものの外観を変え、豊饒と繁栄を予告します。恵みの雨は干ばつから人間を守り、植物の緑を保護し、心の渇きさえ癒してくれるように思われます。

一方、雨は「はかないもの」や「不安定さ」を象徴しているだけに、芸術家は好んで雨を描こうと努めてきました。とりわけ日本の浮世絵画家たちは、「雨に形がない」という障害を克服し、切りつけるような線描や、若い女のさす傘で区切られる小宇宙を出現させることで、雨を表現しようとしました。

西洋でもまた、雨は魅惑的なイメージに成り得ます。例えば、戦後シャンソン界最大の詩人歌手であるジョルジュ・ブラッサンス(1921~81)は、「雨の降らないような愚かしい国」を断罪し、女性の傘の下を楽園にたとえ唄っています。

ガストン・バシュラールの分類

フランスの哲学者で『水と夢 物質の想像力についての試論』等の著作で有名なガストン・バシュラール(1884～1962)は、水を三つに分けました。

第1は、春の水のように澄み、恩恵をもたらす「流れる水」。第2は、嵐のように、激しく流れ下り、ものを沈め呑み込む、「暴力的な水」。第3は深い水、どんよりした、「澱んだ水」です。

「流れる水」でまず強調したいのは、河川が人々の想像力におよぼす影響です。例えば、河川は、人々がフランスの国土をどのように思い描くかという点を規定しています。フランスの国土はしばしば六角形と言われますが、むしろ河川が網の目状に流れる様子を呈しています。1903年に出版された地理学者、ヴィダル・ド・ラブラーシュの『フランス地理総覧』の構成は、この河川の網の目状の分布にもとづいています。少なくとも私が通っていた頃の小学校では、フランスの地理は川筋や、河川の流域図にもとづいて学習するものでした。そして、それぞれの河川の水源がどこか知っていることが、大切でした。

西洋思想の歩みにおいて、河川が流れる「蛇行」のイメージは人々を常に魅了してきました。古代ギリシアの哲学者ヘラクレイトス(紀元前6～5世紀)は「万物は流転する」と述べました。我々は決して同一の川の流れて水浴することはありません。川が蛇行しその水は元に戻らないという重要なイメージが、西洋思想を構成している直線的な時間概念を規定しているのです。

【時間概念】

時間は、西洋思想では直線的で後戻りしないイメージで語られる。しかし、世界各地を見ると、何回も同じことが繰り返される円のイメージで捉えられたりする土地もあり、時間は様々な形で想像される。

フランス地理学の最盛期には、小川でさえ人々を魅惑したものです。画家モネ(1840～1926)の伝記を書いた政治家ジョルジュ・クレマンソー(1841～1929)によると、モネは「草のあいだを流れる小川は、モナリザの微笑みにも匹敵する」という表現で「清涼感」を表していたようです。

また、川の流れが、人体の内部を循環している体液の流れと同様のイメージで捉えられていたことも忘れられない点です。

【ジョルジュ・クレマンソー】

第一次世界大戦時に首相を務めたフランスの政治家だが、画家モネの親友であったという側面はあまり知られていない。モネの名作「睡蓮」は、クレマンソーの提案で描かれた。

大量の雨、雷雨、嵐による生まれる「暴力的な水」は、激しい洪水を思い起させます。それは視覚を混乱させ、世界を暗くします。この暴力的な水は、西洋の様々な宇宙開闢(かいびやく)論に登場する根元的な水にも対応するもので、これらの物語の中で、水はこの世の出来事の最初と最後に現れます。水はあらゆる創造と、あらゆる事物に先立つものです。

例えば、聖書の『創世記』によれば、「光あれ」という神の言葉の後に世界の創世が始まり、その一方で神が「深淵」の水を分かった時、「神の意志が水のうえに漂っていた」とあります。

大洪水のエピソードは、西洋やインド＝ヨーロッパ語族や、セム語族の宇宙開闢論の大多数に共通しています。そして「大洪水」の後には水が引いた時の不安、つまり干ばつへの不安が生じます。他方、この世の終末について、聖ヨハネの『黙示録』では、「水が血に変わる日」のことが語られているのです。

【セム語族】

現代のヘブライ語、シリア語、アラビア語、エチオピア語などの系統の総称。セムという名は、『創世記』の中で、ノアの息子のセムが、アッシリア人、アラム人、ヘブライ人、アラビア人等の先祖とされていることからつけられた。

古代ギリシア思想においても、宇宙開闢論においては根元的な水の役割が述べられています。ホメロスと並び称される大詩人ヘシオドス(紀元前 700 年頃)によると、泉と川の水源である「オケアノス(大洋)」は淡水で、波の逆巻く沖合の海をあらわす言葉は「ポントス(海)」です。

紀元前 6 世紀、ミレトスの哲学者タレスは、水を、空気、大地、火と同様に、神の力を付与された四大元素の一つと主張しました。この四大元素の物理学は、プリーストリー(1733~1804)が酸素を発見し、ラヴォワジエ(1743~1794)により、水が水素と酸素の結合であることや、燃焼現象の発見がなされる 18 世紀末にまで、通用していました。

要するに西洋文明圏においては、「根元的な水」が「世界の秩序に先立つ混沌」を表現しているのです。水と原初の混沌が結びつくという点を、ここで記憶に留めておきましょう。

飲料としての水

水の形態の話はこれくらいにして、次に恩恵をもたらす、あるいは災いをもたらす物質としての水に話を移していきましょう。

西洋人は、人が水を飲むとどのような結果になるか、絶えず気を配ってきました。医学者ヒポクラテス(紀元前 460~?)的な伝統は、この点に関して、その後も長く守られることになる飲まれる水の価値の序列を確立しました。

序列のトップにくるのは「雨水」で、現代の「蒸留水」です。とりわけ春の、軽やかで繊細な雨水が好まれ、雨の日に強い風が吹けば、いっそう好まれました。それに較べると夏や秋の雨水には、熱して渴いた大地からの発散物が混じるため、春の雨水ほど身体によくないとされます。雪や氷から生じる冬の水は、もともと繊細な部分が蒸発してしまうので、やはりそれほど身体によくないものでした。

二番目にくるのは「泉の水」で、地中を通るのでミネラル分を含んでいます。三番目は「井戸の水」。そして四番目が「河川の水」で、これは流れる方向で水質が異なるとされました。東から西に向かって流れる川が一番良いのです。五番目は「湖の水」で、川が流れこんでいる場合は、より質が良いとされました。序列の最後に来るのは「沼の水」で、これについては後ほどまた触れます。

こうした水の序列は 17 世紀~18 世紀に新ヒポクラテス主義の枠内で、水であれ大気であれ「運動や循環は有益である」という説にもとづいて強化されることとなります。ただし、いくつかの川の水は、物理的な規準ではなく政治的な規準により、とりわけ高く評価されました。ナイル川、ガンジス川、チベル川、セーヌ川など、大帝国や大国を象徴する川がそうです。

【新ヒポクラテス主義】

「18 世紀には新ヒポクラテス主義理論にもとづいて沼が捉えられていました。古代ギリシアの医者が書いた一連の著作はけっして閑却されませんでした。17 世紀以降の人々はその中でも、風と土と水を論じた著作をしきりに参照したのです。そして病気は接触による伝染ではなく、大気や水や土の汚染によってうつるのだ、という確信が広まります。」(アラン・コルバン著、小倉孝誠訳『風景と人間』藤原書店、2002)

ジャン＝ルイ・フランドラン(1931～2002、フランス、アナール学派の歴史家。『性の歴史』で有名で、その後、食物と味覚の歴史について取り組んだ)が精緻に分析した水に関する古い料理術によれば、すべての水の価値が等しかったわけではありません。野菜をおいしくゆでられるか、パンやビールを作るのに適しているかどうかにより、それぞれの水の価値が決まったのです。水がそのまま飲まれることは稀で、調理され、ウイキョウ、アニス、シナモンなどを混ぜて煮沸してから飲んだのです。

何世紀もの間、渴きをいやす水は慎重に飲むべきもので、空腹時や仕事中は飲まないほうが良いとされました。いずれにしても、水をたくさん飲むことは危険を伴います。かつてのフランスの小学生なら誰でも知っていた、グラン・フェレの逸話について紹介しましょう。

14～15世紀にイギリス人とフランス人が争った「百年戦争」の時代、頑強な農民であるグラン・フェレは、ある夏の暑い日に、たった一人で数多くの敵を倒します。ところがこの武勲の後で、娘が彼に冷たい水を捧げると、彼はそのために死んでしまった、と年代記の作者は述べています。冷たい水は危険で、人体に本来備わっている熱を妨げるものだったのです。水は少しずつ飲むもので、決してごくごく飲んではいけないとされました。消化を遅らせ、時には停止させてしまう怖れがあったからです。18世紀になってもなお、水をたくさん飲む人は奇妙で、冷たく、怠惰な人間と見なされていました。

水の味に関しては、北の国々よりも地中海沿岸やイスラムの国々の人々のほうがうるさいようです。ただし、この地理的区別を誇張してはなりません。場所はどこであっても、ある泉や、ある井戸の水はその清涼感と独特の味によって評価されたのです。

いずれにせよ西洋では、こうした飲料としての水をめぐる言説に代わり、近代に入ると科学的、細菌学的な言説が支配的になっていきます。フランドランが指摘したように、あらゆる飲み物のなかで、水はいちばんはっきりと科学的な言説の犠牲になったものです。我々西洋人は見たり、聞いたり、触れたり、浸かったりするものとしての水を評価しますが、飲むものとしての水を評価することはあまりなかったのです。フランドランは書いています。「西洋人が水の味について語るのは、それがまずい時だけである。おいしい水は匂いもないし、味もない。まずい水は分析の対象になる」。

恩恵をもたらす水

次に、「恩恵をもたらす水」という側面を見てみましょう。

西洋の文献は絶えず泉を讃えてきました。とりわけ泉が河川や、噴水や、湖の水源になっている場合はそうです。というのも泉の水は「生命を維持し、若さを保つ力がある」とされるからです。

その水は若返りの泉に結びつき、泉の水は純潔と処女性を表します。西洋神学の文献においては、処女性の偉大さは、清水の湧く泉の比喩で語られます。変質してないもの、混じりけのないもの、起源から切り離されていないものの本質と存在を象徴するのが、泉だからです。

さらに広げると、泉の水が具現しているのは自然の恵みであり、豊かさであり、大地の恩恵なのです。そして、人間は、恵みをもたらす、繁栄のもとになる泉の水を見出す希望を抱きつづけます。それは人を原初の状態に立ち戻らせてくれるかもしれません。聖書の樂園の庭にあったのは、海ではなく、泉であって、人々は飲んでそこで水浴びしたのです。

精神分析学者は、泉の水と、古い記憶と結びついた母胎の羊水をすぐに結びつけますので、ここでは特に強調しません。ただ、人類学者によれば多くの文化において、水に関する語彙は、母親あるいは母親の役割の名称によく似ているということは指摘しておきたいと思います。

泉に較べると、井戸の表わす意味はもっと両義的です。井戸には、一方で穏やかな水があります。井戸の穴は丸く、空を映しだす穏やかな水の魅力、大地の深みを想起させる薄暗い液体の静けさ、それらに惹かれ人は井戸をのぞきこむ。まるで井戸から、世界の起源について何かしら啓示を期待しているかのように。しかし同時に、井戸の縁石から中を見たいという誘惑は、深みに落ちるといふ脅威にもなります。井戸は地下世界のもつ恐怖心につながり、底無しの奈落を想わせ、奇妙で恐ろしい悪夢のような生き物が住まう場所かもしれないのです。井戸の深い闇が生じさせる恐怖は、海底の深淵のイメージが引きおこす恐怖とは異質のものなのです。

西洋の歴史において、恩恵をもたらす水は、それを讃える美学と切り離せません。古代以来、都市の繁栄や富、美しさを示す泉は、大都市に不可欠な「水の装飾」でした。古代ローマでは、豊かさや都市の見事さを証明するのが、泉という水の装飾だったのです。

また恩恵をもたらす水は石や鉱物と結びつき、温泉療法を流行させました。その変遷は、その後二千年間に渡ってたどることができます。古代ギリシアには人を癒す水がすでに存在していたということ、忘れないようにしましょう。既婚女性や適齢期の若い女性を不妊症から守る水です。18世紀には、浜辺に対する欲望が生まれ、イギリスでは海辺の別荘生活が流行しますが、これは内陸部の温泉療法をモデルにしたものでした。

災いをもたらす水

恩恵をもたらす水と対照的な位置を占めているのが、「災いをもたらす水」です。これを理解するには、二つのことを出発点にすべきでしょう。第一に、澱んだ水が人々の心にどのように映ったか。第二に、あらゆる種類の生物に満ちあふれている泥土や沼沢地から発生するとされる多様な生き物が人間の想像力に引きおこす恐怖心です。

西洋で「沼への恐怖」がピークに達したのは、新ヒポクラテス主義が栄えた18世紀であるように思われます。例えば南イタリアのような地中海沿岸の沼地は、地獄の光景そのものと考えられていました。沼地のせいで蔓延するマラリア、そこから発する瘴気、沼地の澱みが予想させる汚らしい生物の群れ、灼熱の太陽との不吉な結びつきのせいで、沼地はまさに世界の終焉の前兆のようなものだったのです。西洋では、澱んだ水はしばしば呪いと結びつけられます。沼の有毒ガスから生じる“きつね火”によって示されるように、滞った水には不吉な力があると人々が信じていたことは、ジョルジュ・サンド(1804~1876)のもっとも有名な小説の一つ、『魔の沼』(1846)で語られているところです。

また、「洪水」は、歴史家ジャン・ドリュモア(『恐怖心の歴史』『楽園の歴史』『告白と許し』)などの著作で有名。1923年生まれ、アナール派第3世代の歴史家がその歴史を辿った「時代の様々な不幸」の一つであることは、言うまでもありません。

さらに、これは歴然たる事実なのであえて繰り返さなくても、ロマン主義時代には、「水によって呑み込まれる」という幻想が人々を魅了したことだけは強調しておきましょう。川や湖で溺れること、澱んだ水の中に飛びこむ女性の自殺(19世紀のフランスでは人が自殺する場合、男は首を吊り、女は身投げします)、そして危険な水への恐怖は、いくつかの優れた文学作品に着想をあたえました。例を二つ挙げておきましょう。一つはイギリスの女流作家ジョージ・エリオット(1819~1880)の『フロス川の水車』。もう一つは、娘レオポルディーヌの溺死を嘆いたヴィクトル・ユゴー(1802~1885)のすばらしい詩「ヴィルキエにて」(『静観詩集』に所収)です。

【ロマン主義の時代】

18世紀末～19世紀前半にかけてイギリス、ドイツ、フランスを中心に展開された思想。合理的な理性に対抗して、個々人の感性や想像力の優越を主張したもので、多くの文学、芸術、思想に影響を与えた。コルバンの講演の後半で登場するルソーの小説『新エロイズ』もこの時代のものである。

この時代、澱んだ水に対する不安感は、コレラの原因は水にあるという確信によっていっそう煽られました。その後は、細菌学者パストゥール(1822～1895)による医学革命と、チフスの伝染に水が関わっていることが明らかになったことにより、「恐ろしい水」というイメージが強まります。

さらには、「万物は流転する」と述べたギリシアのヘラクレイトスの哲学的観点から言えば、澱んだ水だけではなく、流れる水、つまり河川の水ですら苦痛をとまいません。なぜかと言うと、流れる水は取り返しのつかないものの象徴であり、戻ることのない旅への誘いであり、変化に対する恐怖をはらんでいるからです。

聖なるものとしての水

水は聖なるものとも繋がっています。水には清め、浄化する機能と、倫理的な価値が備わっています。これが西洋社会において、水をめぐる想像力の根本的な特徴に他なりません。古代ギリシアでは、すでに汚れを洗い流し、取り去る浄めの水は様々な儀式で常用されました。性交や出産の後では、身体を洗うのが義務でしたし、葬式を執りおこなう前に、水が遺体をさわやかにし、活力を回復させるとさえ考えられていたのです。

また、キリスト教徒にとっての水は、まず洗礼の水です。この想像力へのインパクトの根源にあるのは、聖ヨハネが父なる神と聖霊をあらわす鳩がいる前で、ヨルダン川の水でイエス・キリストに洗礼を授けたという場面です。現在カトリック教徒のあいだでは、水に身を沈めて洗礼を施すという方法が再び盛んになっています。いずれにしても、形式がどのようなものであれ、洗礼の水は神の名において洗礼志願者をキリスト教徒に変えるものなのです。洗礼はキリスト教の最初の秘蹟に他なりません。

しかし、西洋における水の聖性は、これだけに止まるものではありません。とりわけガリア地方では、原始キリスト教が泉のもつ治癒力に注目し、それを神聖なものにしましたが、この治癒力はしばしば、病を治す聖人への信仰と結びついています。フランス中部の「良い泉」はいまだに巡礼地です。

19世紀でもっとも有名な事件である「ルルドの奇蹟」は、ピレネー山脈の急流や洞窟の水と密接な関係があります。聖母マリアが洞窟の中で、しがない羊飼いの少女ベルナデットの眼前に繰りかえし出現したのです。そこでは泉の水と、身体の不自由な巡礼者や病気の巡礼者が浸かる貯水盤を介することによって、治癒の奇蹟が起きます。

【ルルドの奇蹟】

1858年、南フランス・ルルドに住む貧しい粉屋の娘ベルナデットは、近くにあるマサビエル洞窟で18回にわたり聖母マリアを目撃し、マリアが触れた岩から泉が湧出し、瀕死の患者が奇蹟的に蘇った。ローマ教会は調査を行い、1923年に聖母出現を「奇蹟」の公式事実として認定した。この場所に現在は教会が造られ、年間200万人が訪れる大巡礼地になっている。

さらには、信者が教会に入る時、人を浄める聖水が使われます。入る時に、信者は聖水盤に浸した右手で十字のしるしを切るのです。この聖水には、他の聖なる物質やものと同じように、悪魔を祓う力があります。悪魔に取り憑かれた者には聖水を振りかけます。

エロティックな水

水がもつエロチックな意味、裸体を称賛するための水がもつエロチックな意味について、まだ述べていません。ギリシア神話の水の場面に登場する数多くのニンフ(水の精)が示しているように、爽やかな水と若い女性のみずみずしさの間には、暗黙の対応が成り立っています。

また、現代に近いところでは、ドイツの詩人ノヴァーリス(1772～1801)の作品に登場する、若い女性の水のようなイメージ、フランスの詩人ジェラルド・ド・ネルヴァル(1808～1855)のアドリエンヌ(『シルヴィー』の作中人物)、さらにはアール・ヌーヴォーの倒錯の偶像、恋人を水の深淵に引き寄せ豊かな髪を流す女たちなどが、そのことをよく示しています。こうした例から考えられるのは、人々の想像力のなかで、「母親的な水」から「女性的な水」への転移が起こったらしいということです。

また、造形芸術において頻りに扱われるテーマは、水浴びをしている女性が不意打ちされるというテーマです。女性が川や泉水で水浴びしている、あるいは浴槽で湯浴みしている図です。西洋芸術において描かれる女性像は、しばしば水と結びついた女性像なのです。女性のヌード彫刻と泉の水、水の流動性と欲望の流動性が一致しています。

造形芸術が水と結びついた女性のヌードを表象することによって、水は様々なものと結びつけられます。好色な牧神とニンフからなる組み合わせに表れた「男の欲望の激しさ」。聖書に出てくる老人たちの視線にさらされる「水浴するスザンナ」のテーマである「覗き趣味」。また「欲望と覗き趣味が結合したもの」としては、ダヴィデ王が欲望を向けるバテシバの入浴の場面が挙げられます。

【バテシバ】

旧約聖書中の美女。入浴中の姿をイスラエルの王ダビデに見られ、召され、その妻となり、ソロモンを生んだ。近世以降、バテシバの入浴や化粧の場面が好んで描かれ、レンブラントの1654年の作品に「バテシバ」がある。

さらに、「女性の脅威」を表すものとして、オデュッセウスの物語から19世紀の民話にいたるまで見られる「セイレン」という存在。

【セイレン】

ギリシャ神話の人面鳥身の海の精。シチリア島近くの小島に住み美しい声で船人を魅了し島に上陸させて彼らを滅ぼしたという。オデュッセウスの船がここを通った際、部下の耳を蠟でふさぎ、自らの身体を帆柱にしばりつけておいたため、セイレンの歌を聴いても無事に通過することができた。こうしたセイレンは、後生になると、人魚や水の精の女性の誘惑者として画家達によって描かれることになった。

そして、「実際に望まれる女性像の誕生」として、波から生まれたヴィーナスの姿。さらには「若い女性と死の結びつき」として、シェイクスピア『ハムレット』に登場するオフィーリアが強烈に象徴している女性像が現れます。

とりわけ19世紀後半の画家たちは、女性が身繕いしたり身体を洗ったりするときの動作や姿勢を好んで描きました。これは男の覗き趣味を満足させてくれるもので、例えばドガ(1834～1917)やボナール(1867～1947)の作品がそうです。これは女性の水浴シーンの伝統に連なるもので、18世紀にルイ15世の宮廷画家であったブーシェ(1703～1770)が描いた女性のエロティシズム(「ディアナの水浴」等)。あるいは、同じくフランスの画家アンゲル(1780～1867)の作品「オダリスク」のもつエロティシズムにも示されています。西洋で

は水が女性の肉体、ふくよかで滑らかで、男を待ち望む女性の肉体を想起させます。水に映し出される女性の裸体は、男の欲望を一層そそのめるのです。灼熱の砂漠の中にあるオアシスは、水があることを知らせると同時に、官能的な悦楽を予告してくれるのです。

運動力の源としての水

次に、「運動力の源としての水」という重要な問題について論じましょう。運動そのものがエネルギーを象徴しているような水のことで。

河川の水の力学、水の流れ、激しいほとばしり、その圧力などは、嵐で荒れ狂う海のうねりとは異なります。一見穏やかそうで、しかし危険な河川の水と、荒れ狂う海の水では、水の中に沈む時の形態も異なります。

西洋の歴史において、水は運動と労働を補助するものでした。10世紀から18世紀までの間、とりわけ10世紀から12世紀にかけて、前工業的な都市化の過程で、水はきわめて重要な役割を果たしたのです。例えば中世には、都市がしばしば小ヴェネツィアの様相を呈していましたが、その手工業の下部構造が水と密接に関連していたのです。水がなければ粉ひきや、機織りや、染め物職人や、なめし職人などはありません。河川と結びついた職業はフランス革命時代、つまり18世紀末まできわめて重要なものだったのです。

中世では、貴族階級にとって水が娯楽の要素であったということを除くれば、水の力学のコントロールと水力エネルギーを高めることは、開墾作業や、シャトー（城館）や都市の建設と並行しておこなわれたものでした。

13世紀以降人々の想像力にしっかり根付いていた「製粉産業」と「水車」は、恩恵をもたらす水と、不吉な水という二元性を帯びています。一方では、水車の車輪を動かし、そこから激しく流れ落ちる水。他方では、上流から水車に水をみちびく水路の深く、濁った、怖ろしい水。火を自在にあやつる鍛冶屋や蹄鉄工がそうであるように、水を支配する粉ひきは、不吉なものに繋がっていることになるのです。

河川の流れを利用する活動としては、「筏流し」とその過酷な労働の重要性を強調しておくべきでしょう。

さらに、河川の航行もあります。長い間、内陸の水上交通路は旅人にとってもっとも速く、便利な交通手段でした。17世紀のオランダでは、運河を航行する大きな船のリズムが風景の評価に影響を及ぼし、オランダ風景絵画の成立において、それが果たし役割は実に大きなものでした。

自然に対する考え方を変えた18世紀末の根本的な諸発見についても、論じる必要があるでしょう。その発見は何かと言えば、浸食作用や、山と丘の斜面から剥がれ落ちた土砂が移動するメカニズムが遅ればせながら発見されたことです。つまり、堆積作用の研究です。水と風の絶え間ない作用により地表が形成されたと主張する「連続説」が、洪水の影響で形成されたものだとする「天変地異説」に勝利を収めたのです。さらに19世紀初頭には、氷河による浸食作用が明らかにされ、電気を生産するために水力エネルギーが使用されるようになりました。

この点に関して、とりわけ20世紀半ばに水の想像力に及ぼした大規模なダムの影響は、いくら強調しても足りません。第二次世界大戦直後のフランスでは、石炭採掘の再開と並び、ローヌ川に設けられた大規模ダムが国土復興と、来るべき繁栄の予兆を象徴するものでした。当時、ダムの落成式はドキュメンタリー映画の大きなテーマの一つであり、共和国大統領はそのために足を運んだものです。

感情に影響を及ぼす水

さて、まだ、本質的なことが残されています。欲望の昂りや、夢想の構図、感情の性質に水が及ぼす「影響力」のことで。私は人類学者ではありませんので、歴史的データだけに着目しましょう。

人間を運ぶ川の流れと「死」が結びつくことは否定できません。ギリシア神話に出てくる冥界の川(死者が渡らなければならない川ステュクス)が、それをよく表しています。この冥界の川は、溺れた者の姿をした死者たちの国につながっているのです。またより一般的に言って、水の流れのままに漂うものは死に向かう運命にあると言えます。

鏡としての水もまた、死を招く罠となります。それを裏付けるのが、ナルシスの神話です。ナルシスは水に映った自分自身の美しさに魅了されて、命を落とすのですから。空や、世界の様々なもの(岩山、植物・・・)を映す鏡であり、月を反射する水は、海とは違い、自己発見と自己省察の喜びをもたらしてくれます。おそらくそれゆえに、水は肖像画というジャンルを生み出しました。穏やかで、深く、静かな水は、我々に自分自身の姿を送り返し、それを断片的に垣間見させてくれます。

水はまた、我々が自分でも理解しがたい存在であるという感覚から生じる憂鬱に通じます。哲学者ガストン・バシュラールが指摘しているように、鏡の戯れに魅了されて命を落とすナルシスは、魅惑的で危険な水が「絶望の物質」でもあるということを示しているのです。

18世紀末の西洋では、水のテーマから少し逸れますが、しかしそれといくらか関係する出来事が起きます。「気象学的な自我の到来」です。どういうことかと言うと、自我の揺らぎ、自我の状態の変化、と水の流動性のあいだに照応関係があるという考え方です。

ビエンヌ湖でたった一人船に乗ったジャン＝ジャック・ルソー(1712～1778)の漂流の物語以来、これは文学上の主題になります。この根元的な体験を語る短い一節を引用しておきましょう。

「寄せては返す水の動き、単調な、しかしときには大きくなる水の音が私の目と耳を絶え間なく刺激して、夢想のあまり消えかかる心の動きを補ってくれた。そしてそれだけで私は、ものを考える必要もなく、自分が生きていることの歓びを感じるのだった」。

ロマン主義時代の西洋で「湖」という詩的なテーマが大成功をおさめた理由は、ここにあります。このテーマを例証しているのは、まさしく『湖』と題されたラマルティエヌ(1790～1869)の詩であり、より広くはイギリスの「湖畔詩人」たちの作品、とりわけワーズワース(1770～1850)です。また、ルソーの傑作小説『新エロイーズ』に明らかなように、湖の波に揺られること、そしてその音が、エロチックな衝動を引き起こすことがあります。この小説の中で語られている、湖上の嵐という原初的な場面について少し述べましょう。若い頃サン＝ブルーに処女をささげた後、彼への愛を諦めたヒロイン、ジュリーはヴォルマール氏の妻となり、二人の子供をもうけます。しかし数年後、貞淑な妻たる彼女はかつての恋人と湖上を船で遊覧した時、湖の穏やかな水が荒れてくると、彼女の心にかつての激しい欲望が湧き上がってきます。さらには、子供の一人を救うために湖に飛びこみ、それがもとで死んでしまうのです。つまり、物語の結末のあらゆる段階で、水が感情を昂ぶらせるというわけです。まず愛の情熱、次に死の衝動。そしてこの『新エロイーズ』は疑いもなく、19世紀前半のエリート女性たちにもっとも強い影響を及ぼした小説なのです。

しばしば夜に行われる水上遊覧は、「時間の流れの中断」を暗示することもあります。ルソーの小説が出版されてから数十年後、詩人ラマルティエヌは『打ち明け話』という作品の中で、「水は我々を支え、我々を揺すり、我々を眠らせ、我々に母親を返してくれる」と書いています。

こうして社会的慣習が変わっていきます。かつてヴェネツィアに倣っておこなわれていたような、イルミネ

ーションで飾られた人工の池の中を船で遊覧するという貴族のやり方を取って代わり、感情的な遊覧や、それまでなかったような男女の出会いの場面が出現したのです。その出会いの儂さは、波の揺れ、転覆の危険、島や放浪に特有の放縦な雰囲気によっていっそう強められます。ジョージ・エリオットが小説『フロス川の水車』の中で語っているように、男のたくましい筋肉を露わに見た恋人は、水に手を浸けながらまったく新たな体験をするのです。

それと同時に社会のエリート層は、ますます浄化され、砂や石炭や海綿で濾過された水を求めるようになります。こうして 19 世紀半ばから、ミネラルウォーターを家庭で消費することが流行していきます。水の循環や清潔さに関するあらゆることに、人々はますます敏感になったのです。都市では、井戸や泉をめぐる争いが増えます。水に対する新たな欲望が映し出しているのは、公的なものと私的なものの境界線が厳密になってきたということであり、治療への関心が大きくなったことであり、環境の悪化に対する許容度が全体的に変化したということにほかなりません。

水の美的規範

最後になりますが、水の表象と様々な美的規範との関係については、手短に触れるに止めましょう。まず、人間に自らの卑小性を感じさせる「崇高美」の規範について言えば、海のほうが河川や湖よりもよく適合しています。それに対して、河川や湖はかつて、「自然美」を表現する際の根本的な要素でした。

例えばローマ時代の詩人ウェルギリウス(紀元前 70~19)の伝統に基づけば、緑の植物のアーチがあり、その真ん中を小川が流れ、平和と瞑想の空間が描かれます。そしてまた水は、「ピクチャレスク美学」の規範が成立していく過程で決定的な意味をもちました。「ピクチャレスク美学」の中心的な理論家と見なされているイギリスの牧師ウィリアム・ギルピン(1724~1804)に言わせれば、「ピクチャレスク」とは、蛇行する川に沿って歩く人が感じる意外な驚きによって培われるものなのです。

その後、滝を愛好する趣味がピクチャレスクな旅をする者の注目を引くようになります。19 世紀には、ジャポニズムの流行によって橋の絵画的モチーフが流布しますが、これもやはり同じような観点から理解できます。

現代では、水は主に科学と、分析と、管理の対象になりました。しかし、だからといって、水の魅力がまったくなくなったわけではありません。水はいまだに、様々な信仰と、幻想と、とりわけ夢を育む豊かな媒体なのです。

会場参加者との質疑応答

- Q. 日本では身体を「浄める水」があります。例えば滝の水に打たれたり、風呂に入ること、身体を浄めます。水を体に浴びて精神を清めるという行為について少しお聞かせいただきたいと思います。
- A. 西洋では、先程申し上げたキリスト教の洗礼以外では、宗教儀式に水が結びつけられているということはありません。強調されることは、水の衛生的な側面です。しかし、この浄める水という聖なる水の言い方は、あまりなされていません。日本と比べれば、直接的な形では聖なる水、清める水といった伝統はあまりないと思います。
- Q. 質問ではありませんが、一番最後に、現在の水は、科学と分析の対象だけではないと述べられました。私は科学者ですが、水が夢と幻想を豊かに与えてくれるものであるという言葉に、大変感銘を致しますと共に感謝致します。そして、今日の話が科学者だけではなく、我々にとって、夢と水についての大きなイメージを与えてくださいましたことを、お礼申し上げたいと思います。
- A. ありがとうございます。
- Q. 先ほど、ダムのお話を準備されてきたと思うのですが、時間の関係でお話できなかったようなので、私共是非関心の深い部分なので、発表していただけないでしょうか。
- A. 私は、技術者ではないので、ダムそのものについてエンジニア的な面についてお話することはできませんが、申し上げたいことは、フランスの1940年～50年代の復興期に、ダムが重要な役割を果たしました。また、水に対する経済的ニーズが高まり、その時代にダムは非常に重要な役割を果たしました。映画の面でもダムを巡る水力発電について、重要なイメージが作られていきました。象徴的なレベルでは、ダムを作ることにより、我々の進歩、経済的な開発、そして豊かなエネルギーを確保できる、これは水力発電により重要な水からエネルギーを得ているのだということを、子供たちに語って聞かせたというシンボルとしてダムがありました。したがってダムのオープニングには、必ず共和国大統領が参列したわけです。そのような意味で、非常に象徴的な意味での機能は、ダム建設が担っていたということを申し上げたかったわけです。